

編集後記

本号は、昨年度から南山大学社会倫理研究所が力を入れて研究活動を行っていた「保護する責任」を特集に組み、最前線で活躍している研究者の諸論文を収録することができた。社会倫理研究所主催の懇話会で話題提供をしていただけ

いた内容を基礎に、更に考察を深められた成果がこのたび寄せられた。まず、安全保障の領域で多くの業績を上げておられる吉川元氏（上智大学教授）は、「人間の安全」の問題を斬新な視点から論じておられる。千知岩正継論文は、「保護する責任」を考える上での見取り図的な導入を的確に与えている。池田丈佑論文、上野友也論文、眞嶋俊造論文の三点は、査読を経た論文である。それぞれ重要な問題提起を含み、多くを考えさせる論文に仕上がっている。社会倫理研究所にて研究員としてこれまで尽力してきた中野涼子氏（シンガポール国立大学助教）は、日本・中国との関連で「保護する責任」

が抱える問題を浮き彫りにした。また、第一研究所員として「保護する責任」プロジェクトにもかかわってきており、現在は非常勤研究員である山田秀氏（熊本大学教授）は自然法との関連で、「保護する責任」を考察している。そして、序論を執筆された研究所非常勤研究員の山田哲也氏（椋山女学院大学准教授）は、特集を組むに当たり、全体的な観点からアドバイスを惜しまれず、又、全論文に目を通された上で、本論題にかんする問題の所在を論じていただいた。記して感謝したい。

論説としては、査読論文として山口宏氏の「ドイツ福祉国家思想の源流と現代性」をお届けすることができた。上村崇論文においては、高等学校の現場を重視しながら、教育と倫理の関係性について考察している。

講演コーナーには、猪木武徳氏（国際日本文化研究センター所長）の「経済学における厚生概念と人間の幸福」を載せることができた。科学的厳密性を重んじる経済「学」において、「厚生」概念が本来それに定位されなくてはならなかった「人間の幸福」への回帰がみられる事情を明瞭に論じていただいている。

社会倫理の基礎のコーナーでは、ヨハネス・メスナーの「階級闘争か、それとも労使協調か」を掲載する。

書評コーナーでは、従来とは異なる方法を採用してみた。字数によってカテゴリーを三種類に分け、少しでも多くの書物の紹介ができるよう今回から採った試みである。

今回『社会と倫理』第二十二号を刊行するに当たり、多くのベテラン、中堅、新進気鋭の研究者のご協力を得て編集作業を実施できたことを、感謝の念をもって述べておきたい。特に、編集全般において、中野涼子氏の多大な協力を得たことを、記して感謝したい。

奥田太郎、マイケル・シーゲル